

平成27年度第1回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成27年8月26日（水）午後3時00分から午後5時00分まで
- 2 場 所 愛・地球博記念公園 地球市民交流センター 体験学習室
- 3 テーマ 緑あふれる街づくり
—愛知万博10周年に全国都市緑化あいちフェアを開催！—
- 4 意見交換者（五十音順、敬称略）
天野 麻里絵 株式会社豊田ガーデン花遊庭 ヘッドガーデナー
角和 保明 特定非営利活動法人どんぐりモンゴリ 代表理事
近藤 靖之 愛知県立半田農業高等学校 教諭
中川 有里 株式会社プレック研究所中部事務所 次長
永田 晶彦 愛知豊明花き流通協同組合 代表理事
浜口 祐子 特定非営利活動法人もりの学舎自然学校 理事
古木 明夫 中部電力株式会社新名古屋火力発電所 所長

【大村知事】

皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。

本日は、お忙しい中にもかかわらず、こうして知事と語る会ということで参加をいただきましてありがとうございます。毎年、これは私になる昔から、このところずっと年に3回ほどテーマを変えまして、直接県民の皆さんとお話をさせていただくということで語る会をやらせていただいております。今年度の第1回目が今日でございます、「緑あふれる街づくり」をテーマというふうにいたしました。

愛知県では、「自然の叡智」をテーマにちょうど10年前、2005年、愛・地球博、愛知万博を開催いたしました。今年がちょうど万博10周年ということでございまして、来月の9月12日から11月8日まで万博10周年記念の全国都市緑化あいちフェアをこの場所で開催させていただきますので、今年の第1回の語る会のテーマは「緑あふれる街づくり」というのをテーマにさせていただきました。

そういう形で都市の緑化とか、環境保全とか、そういったさまざまな森づくり、そういったものに実際に現場で取り組んでいただいている皆さんに今日はお集まりをいただきまして、それぞれ皆さんの活動だとか、そして苦労話とか、楽しかったこととか、これからこうしたいとか、そういったことも含めてご意見をいただければありがたいな、というふうに思っております。

今もお話をさせていただきました。これはユーストリームでずっとライブで出ておりますので、アピールしたいことはどんどん言っていただいて、そうでないあまり言いたくないことはこうしていただいても結構でございますので、お任せいたしますので、大いに皆さんまた気軽にといいですか、普段の調子でお話をいただければ、というふうに思いますので、よろしく願いをいたします。

なお、2005年の愛知万博、そして2010年が生物多様性条約のCOP10、そして2014年去年がESDユネスコ世界会議ということで、環境をテーマにした大きな国際イベントをこの10年で3つこの愛知はやってまいりました。日本一、世界一と言ってもいいと思いますが、これだけの製造業、ものづくりの集積地だからこそ、やはり持続可能な地球を、社会を作っていくために我々がやることはたくさんあると思うんですね。昔のようなただ単に作って捨てればよいというような、そんなことではサステナブルではありませんので、サステナブルな地球社会を作っていくために、この愛知から発信をしていくことはまだまだいっぱいあるというふうに思います。

ぜひ今日の会が実りの多いものになりまして、また皆さんの主張がどんどん発信をしていけるように心からお願いさせていただいて、冒頭まず私からご挨拶とさせていただきます。何とぞよろしく願いいたします。

それでは、まず順番にそれぞれ5分間ぐらいをめでにいたしまして、常日ごろの活動のご紹介、それから緑化に関するご意見、緑づくりなどに対するご意見、ご提言などなどをいただきたいと思います。その後にもたいたいただきましたご意見をもとに全員でフリートーキングを行いたいというふうに思っておりますので、よろしく願いをいたします。

それでは、先ほど紹介をした順番にお願いをしたいと思います。

それでは、最初に浜口さんからずっとこういう感じをお願いをいたします。じゃ、浜口さん、どうぞ。

【浜口】

それでは、私、浜口のほうからお話をさせていただきたいと思います。

私は、先ほどご紹介いただきましたように、もともとは万博10周年というお話もあったんですけども、私は万博で人生が変わった人間の一人として、多分そういう方はたくさんいらっしゃると思うんですけども、10年前は愛知万博の森の自然学校という一番大きなパビリオンにいました。

一番大きなパビリオンといっても実は森がパビリオンなんですけれども、そういったところで自然の楽しさ、おもしろさ、不思議さというのを皆さんに気づいていただく楽しいプログラム、体験プログラムの提供をしてきました。それがきっかけで私自身自然が好きだし、

そういう環境ということもこれから関心を向けて活動していかなくちゃというところで、今までこういった活動が続けてきています。

そういった活動から、今日は緑あふれる街づくりに何か役立つことをというふうな形で、ちょっとご提案を幾つかさせていただこうと思います。

まず、1つは、緑の魅力を伝えるインタープリターということで、まず私がやっている仕事はインタープリターといいますけれども、これは自然案内人とか、森の案内人というふうに言われています。もともとは通訳をする人という意味なので、自然と人との通訳とか、そういう橋渡しをするという役割なんですけれども、私たちはこういう公園に遊びに来た、ふらっと遊びに来た人たちに、この葉っぱをよく見てみてとか、この葉っぱの形は何に見えるとか言うと、これは柏餅の葉っぱに似ているとか、実はこれはドングリの木なんですけれども、多分角和さんが育ててくださっているようなドングリの木があのもりコロパークの中にはたくさんあるんですけれども、そういったこと、多分普通に歩いていたら気が付かないことも、このインタープリターがちょっと一言声をかけたり、あるいはちょっとした体験を提供することで一般の方々にも目を向けていただけるようになります。

何よりもインタープリター、一番左にいる男性なんですけれども、すごくうれしそうな顔をしてお話ししているんですね。インタープリター自身がやっぱり自然が好きで、これってすごくおもしろいんだよ、というオーラを出しているからこそ、お隣の女性たちもすごく何か楽しそうだなという感じで見ているんですけれども、まずはインタープリター、魅力を伝えるインタープリター自身が緑の魅力というのを感じて、そしていつも楽しく過ごしているということが大事だなというふうに思っています。そんなインタープリターがもりコロパークにはいますけれども、もっともっとほかのいろんな公園にもたくさんいたらすごく楽しいんじゃないかなと思っています。

そして、全ての公園にハンモックをということで、これは実は左側の写真は久屋大通公園ですね。ほんとうにまちの中の、まさかビルがいっぱいあるところにこんな緑があるのか、というふうに思われるかもしれないんですけれども、こういったまちの中の公園でも実は自然、緑を感じることでできるんですね。ちょっとした木陰にハンモックを張ってみると意外と皆さん立ち止まってくださって、ハンモックに乗るとすごく気持ちいいんですね。ビルばかりだと思っていたところがハンモックに寝転がると実は上にはすごく緑がたくさん広がっている風景が見えるわけです。そういったことで緑の魅力を感じていただくという1つのツールとして、このハンモックというのをぜひお勧めしたいなということで、どの場所にもハンモックがあって常に寝っ転がって見られるよというようなところがあると楽しいんじゃないかなと思います。

そして、緑の魅力を感じられる体験プログラムの提供ということで、これはモリコロパークの中で実際に企業さん、それから行政の方、そして私たちNPOで協働してつくったプログラムなんですけれども、下のほうに写っていますこれは「ハンディびょうぶ」という、ハンディーサイズのびょうぶ型の冊子です。こちらにモリコロパークの自然がずっとイラストになっています。

実際にこれを見るだけだときれいだなで終わっちゃうんですけども、森の中へ行くと同じ風景、そして同じ生き物が見つかったりします。ということはこのインタープリターが途中で声かけをすることで、絵の中の自然がほんとうにあるんだというのを気づいていただくというような、こういった体験プログラムを提供しているんですけども、これもいろんな場所で、緑のある場所でそういったきっかけづくりができたらいいなと思っています。

そして、こういった楽しいことをやっているインタープリターにぜひ会いに行こうということで、この緑化フェアの期間中、10月11日、12日にはインタープリター愛・地球ミーティングということで、世界のインタープリターも集まって、私も日本代表として出させていただくんですけども、こういったインタープリテーションのお話、そして自然のことをみんな語り合いたいなと思っていますので、ぜひお越しいただければと思います。

以上で私からのお話を終わりたいと思います。ありがとうございます。

【大村知事】

ありがとうございました。

ただ、公園の木にあれだと公園の管理する人に木が傷むとか言って怒られせんかね。

【浜口】

そうですね。なので、ちょっとそういう養生をしたりとか、そういうことを私たちも普段やっているの、木にちょっと布を巻いたりとか、あとずっと同じ木にやらないとか、そういった工夫をしながらやっていけたらと思います。

【大村知事】

ありがとうございます。

それでは、続きまして近藤さん、お願いいたします。

【近藤】

お願いします。私は、愛知県の知多半島にあります半田農業高校で、教科は農業を担当しております近藤です。よろしくをお願いします。

私は、生徒たちと中部国際空港セントレアの空港施設内でグリーンカーテンの緑化事業に取り組んでおります。グリーンカーテンは自治体や企業が環境保全活動として取り組んでおまして、空港のほうも東日本大震災があったときに空港でもゴーヤを使ったグリーンカー

テンを行おうということだったんですが、なかなかうまくいかないところで本校に栽培方法の依頼がありました。

これは生徒たちと実際に空港の施設内を見学に行ったんですけれど、外に緑のカーテンをつくるのではなくて空港の中につくります。そうすると空港の施設もガラス面が複雑にできておまして、日照時間に差があったりだとか、それからUVカットフィルムが全面に張られています。それから、やっぱり病害虫が飛び交うような空港ではいけませんので、それもだめ、においを放つ肥料や培養土もやめてほしい、それから温度計とか環境調査をしたかったんですが、空港内にいろいろ計測器具を置くと爆弾と間違えられるので、それもだめだということだめでした。

いろいろと見学をしてみると課題があったり、それから現場に適した植物も調べたところ、ゴーヤではなくてパッションフルーツがいいのではないかとということで、パッションフルーツは大分認知はされているんですけど、一夏でカーテンにできます。それから、葉っぱに光沢があって美しいですし、花も文字盤のような花、果実も成長するということで空港にふさわしいのではないかとということで、本校で、農業高校ですので、全て挿し木繁殖をして、土も自分たちで作って空港に植える苗をつくりました。

これは2012年の取組なんですけれども、生徒たちも空港で実習するということで泥や水を落しちゃいけないとか、それからお客さんの動線を確保するだとか、いろいろ苦労しながらも何とか咲かせることはできたんですけど、遮光率を高める工夫だとか、それから花や実が少ないという課題が挙りました。

生徒たちもせっかくやるのであればもっといいものをつくりたいとか、もっと花を咲かせたいという意欲がどんどん出てきてまして、あとは空港を訪れるお客様が非常に興味を持っていただいて、楽しみにしているお客さんが多くて声かけをしていただいています。生徒もそれでほんとうにやる気になっていろんな課題に取り組んでくれました。これはフェイスブックなんですけど、空港側のフェイスブックに私たちが取材していただいて更新していただいています。生徒もそれを見て励みにして頑張ることができました。

2014年、これは昨年なんですけど、もっと遮光率を高めたいということで、つるを折り返したり、吊る作業をしたりして遮光率をアップしました。これは去年なんですけど、全長80メートル、高さ3.2メートルのところ、ガラス面を全て覆うことができました。2012年と比べると大分緑も濃くて遮光率を高めることができました。

グリーンカーテンは効果がなかなか、一般の方も、いいとは聞いているけど、どれくらいかわからないところもあるんですけども、サーモ撮影したところ、青い面がグリーンカーテンになります。それで、上のほうの黄緑だったり、赤っぽいところは空港のガラス面にな

るんですけれど、ガラス面から下の通路も熱放射で温められてグリーンカーテンの効果を確認することができました。

去年は700輪以上花が咲いて果実も収穫できまして、これも生徒がアイデアを出してシフォンケーキだとかタルト、ヨーグルト、焼き肉のたれなんかも作りまして、ゴーヤだとなかなか年配の方とか子供は苦手だということで、こういった加工品を作ってアピールもしました。

グリーンカーテンなんですけれど、結構皆さん興味があるんですけれども、取り組んでいる方は35%です。これはアンケートをとったんですが、ただ、一回グリーンカーテンに挑戦してみると次の年も実はやりたいという方は94%おりまして、まずこのグリーンカーテンに取り組むところを後押しできるように、学校のほうも活動の一環として取り組んでいます。

空港のイベントプラザでアピールをしたりだとか、とにかく空港の中だけじゃなくて外でもグリーンカーテンのアピールを生徒たちと一緒にやっております。今年はもし空港に行かれましたら、「かざせばわかるさ、パッションフルーツの魅力！」ということで、QRコードをかざすといろいろな、冬越しができることだとか、加工品のことだとかが紹介されていますので、空港へ行ったときにはぜひグリーンカーテンのほうも見ていただければと思います。

以上です。

【大村知事】

ありがとうございました。

続きまして、天野さん、お願いいたします。

【天野】

よろしく申し上げます。私のほうは、ご紹介いただきました造園会社の豊田ガーデンというところに勤務しているんですけれども、普段は造園会社として、個人のお客様のお庭をつくることを主に仕事しています。来月12日からのこちらのあいちフェアでもいろんな花空間、棚田をはじめとする花を使われた空間というのが作られているんですけれども、弊社におきましても花のあるお庭づくりということで、こちらの写真のお庭はモデルガーデンとして花遊庭という名前で、できて20年になるんですけれども、花のある空間を、実際に庭を希望する方や、あとお花が好きな方に見ていただきたいということで一般公開しているガーデンになります。

花があるお庭というのは、やはり見る方がすごく親近感を持ったりとか、憧れを抱かれたりとか、やってみたいというふうに興味を持たれる方が多いんですけれども、実際にそれをやってみるとなると、まずどこから始めていいかわからないとか、お手入れがわからないとか、疑問点がたくさんあるということで、こういったお手入れをしながらこれをどのようにしたら実際に自分たちでもできるかというのを、こちらが提案プランとしてお伝えしていく

ことが仕事かなと常々考えています。

写真は今年の5月の一番花のいい頃なんですけれども、バラと宿根草が咲く様子になります。そして、これが先ほどの季節から半年前の様子で、ちょうどこれから迎える晩秋、11月終わり頃の様子です。同じ愛知県豊田市なんですけれども、やはりここと同じように夏は35度以上猛暑日が続きますし、冬は冬で氷点下にもなるということで、なかなかその気候の中で一年中花のある美しい景色というのをつくる、維持するというのはやはりとても骨が折れることなんですけれども、それをいかに工夫してわかりやすく伝えるか。そして、一般の方にもやっていただくかということを実践しながら日々伝えていけたらと思っています。

先ほど植えていたものが宿根草の苗なんですけれども、これも先ほどの半年後、初夏に向けて半年前から植えるという過程を踏んでいます。そして、その間に球根、チューリップを見せて見せ場をつくるか、そういう形で目的を持って、一般的なつくる方、お花が好きな方にどうしたい、どうしたければどのようなプランをしたらいいかということ、こちらが間を取り持つような形をとるのがすごく大事だと思っています。

一年中見せるということで毎年季節を変えながらメンテナンスを行っているんですが、やっぱり花のおもしろさというのは、花棚田などもさまざまな花を組み合わせで今会場をつくられているんですが、やっぱり色合い、組み合わせ、見せ方というのがとてもポイントで、こちらもそれに重きを置いているんですけれども、これはまた違う年なんですけど、ある年はまた色味を変えて、同じ場所でも花の色味を変えるだけでもすごく印象が変わるとか、こういった色の効果も楽しみながらお客様のニーズ、希望に沿った花選びというのもしていけたらと思っています。

そして、実際に植えつけとなると、このように同じようにポット苗の植えつけから始めるんですけれども、やはりこういった季節のタイミング、回数やお手入れということが日々必要になってくるんですけれども、こういったことと自分がイメージする庭というギャップをいかに埋められることができるかということ伝えていくということと、あと、こちらが夏の花壇の様子です。

ちょうど今と同じころにはなるんですが、やはり厳しい夏でも花を見せたいということで、ちょうどこのイベント期間も同じ頃に当たるんですけれども、こういった夏の季節にいかに花を欠かさずに見せるかというのはすごくこれからもネックになってくると思うんですが、やはり暑さに強いすぐれた植物というのがたくさんありますので、こちらの庭のほうでもそういった植物を試験的に使って、それがどうであったかというのをフィードバックしてお客様や希望する方たちに伝えていくことが大事かと思っています。花以外にもこういった葉物のきれいなもの、カラーリーフとも呼んでいますが、こういったものも組み合わせながら楽

しんでいます。

これは場所を変えてカルチャー教室なんですけれども、一般にこういったお花が好きな方にも実践しながら花壇づくりというのもしています。これがちょうど先々月ぐらいなんですけれども、毎月1回だけの手入れでもこのように、ちょっとずつではありますけれども、実践として、どんなふうにお手入れをしたり、植え替えをしたりということを実際に行いながらしています。

また、ここも公園の一部ですが、お手入れ前と、あと切って植え込みをするということで、実際にやはり話だけでは伝わらない部分というのは多いので、作業をしながらやるということで、やっぱりこういった体験するということはずごく大切なことかと思っています。

あとはこういった、こちらは名古屋のフラリエですが、今年はちょっとこういった講座も行ったり、あと栄の今年3月にありましたフラワーガーデンショーでこういった植栽もしたんですが、こういった花の魅力や楽しさというのを伝えていきたいと思っています。

ここは植物公園の植え替えの様子なんですけど、この会場ではボランティアさんが主体になって活動をしています。長年継続してされているベテランの方ばかりなんですけど、やはりそういった方々は高齢化が進んでいたりして、なかなかその後の継続して入ってくる人、長い目で見てどういったこういった人を育てていくかということも大切なんですけど、やはりボランティアのする側の方としては仕事ではなく楽しみという面でもあるので、このように休憩時間中はお茶を飲んで楽しむ時間があるとか、あとはやっぱりこういった活動をすること自体が楽しみであったり、人としゃべる、話をするということが楽しみでみえるということもたくさんみえますので、こういったことを継続的に行うためには、やはり作業としてやる部分以外の楽しみややりがいというのを日々感じていただける場をつくるというのはすごく大切だと思います。

あと、こちらはケーブル局での撮影の風景なんですけど、今花づくりについてのちょっとしたコーナーを作っているんですけど、やはり初めての方でも無理なく楽しめるような、こういった失敗しないということがすごく大事だと思いますので、やはり花というのは日々お手入れがあつてこそなるんですけど、それも度を越すとやはり負担になってしまうということで、5年、10年と続けていけるような楽しめる内容というのを提案していけたらと思っています。

こちらは個人のお客様のお庭なんですけど、市内にもオープンガーデンといって個人のお庭をいい季節中に公開しているというグループがあるんですけど、オープンガーデンをされている方々が集まっている光景なんですけど、やっぱりこういったオープンガーデンの方のお庭というのは全ですごく手が入っているというか、もう庭に住み手の方の息遣いが

聞こえるような場がほとんどで、やはりすごく居心地がよかったり、あときれいにするというのはもちろんなんですが、そこをきちんと生活の場として暮らしの中に取り入れられていて、お茶を飲んだりとか会食をしたりということで場としてきちんと楽しまれているというのがとても印象的でした。

これはオープンガーデンをやっている方の入り口に掲げてあるプレートなんですけれども、こういったオープンガーデンをやってみようというところまで行かなくても、自分のお庭で花を楽しんでみるということは、やはり知らない方同士でも触れ合いのきっかけにもなりますし、玄関周りのこういった小さな植え込み1つでもお花が咲いている。そこから会話の1つが始まるということになりますので、こういった身近な庭からぜひ花のある庭というのを楽しんでいただければと思います。ありがとうございます。

【大村知事】

ありがとうございました。また後ほどご意見をお聞きします。

それでは、永田さん、お願いいたします。

【永田】

愛知豊明花き地方卸売市場の永田と申します。私どもの本業は花の市場でございます。全国に4,500軒の花農家さんがあるんですね。そちらから商品を集荷させていただきましてその取引をしております。

今回は、緑化フェアの植栽に使う植物、その手当てをさせていただきお手伝いをさせていただきました。普段はこのように商売をさせていただいておるわけなんですけれども、これは全国のシェアですね。こんな感じで全国から集まって全国に商品を提供しているそんな市場です。鉢物の取引としては日本で最大、世界で4位になります。品評会とかもしまして、この品評会は年に4つやっているんですけれども、いろいろあります。

それから、駅の緑化だとかリサイクル、それから場内、我々の市場内は1万5,000坪ほどの敷地がありますので、桜を植えたり、グリーンの桜、こんなものですね。それから、壁面緑化をしたり、これは藤なんですけれども、赤い藤だとかいろいろ植えています。カキツバタ、それからこれはテッセンの系統ですね。クレマチスです。それから、これはハスです。スイレン、ちょっと今花は見えませんが。

ここからなんです。我々は商売で花をいじっているんですけれども、実を言うと日本は世界最高峰の花の文化を持った国なんです。それ自体があまり知られていない。まずはそれを皆さんに知っていただくことが緑化の核をつくるなと思っています。これなんかは江戸菊といいます。古典菊なんです。もう江戸時代に開発された菊です。これは嵯峨菊、平安時代に開発された菊なんです。伊勢菊ですね。室町時代になります。肥後菊、これは

江戸時代ですね。コニファーとかも植えていますけれども、寒牡丹。

この文化をどうやって広めていくかなんですけれども、まずは地元、豊明市の中で花の街とよあけ推進協議会というのを作っています。その中では本当に地道な、よくあることなんですけど、コンテストをやったりとか、それから講習会をやったりだとか、絵の講習会もやったり、それから検定試験というのを始めました。

どんなことをやっているかという、豊明市を花の知識日本一のまちにしようという、それが目標でして、花の名前を200個皆さんに覚えてもらう。そのための試験。こんなような試験で、ガーデニングにもフラワーアレンジにも使える最近日本でも見かけることが多くなったこの花は、ガーベラなんですけど、非常に簡単な問題なんですけれども、こういうので、結果的には50問出すんですが、その回答数の多さでランクをつけていくと、そんなようなことで皆さんに参加していただいております。

協議会では視察に行ったりしています。これは佐布里池、知多市ですね。東海市の大池公園、椿の小径だとか、それからポスターの大会なんかもしております。

新春かきつばたまつり、こういった、たまたま日本に我々しか持っていないような遺伝子をたくさん持っておりまして、カキツバタの展示会を始めました。これは花の街とよあけ推進協議会として始めたわけですね。豊明市にある前後駅の前、そちらのほうでお祭りをしております。白いカキツバタ、こんなものとか、いろいろなカキツバタがあるわけです。6弁になった六英花のカキツバタですね。これは豊明の節会といって全然関係ないんですけど、豊明の名前が入っていますので、まちの花のシンボルにできないかなと思ひまして新しく作りました。大村知事にも来ていただきましてありがとうございます。

変わり菊、先ほどちょっと出ましたけれども、こういった古典菊ですね。これは豊明で我々が作った古典菊なので、最近作っちゃった古典菊なんですけれども、こういったものも東海道五十三次それぞれの名前をつけまして、例えば池鯉鮒首夏馬市という東海道五十三次の池鯉鮒の宿場にちなんだ花を作ったり、鳴海名物有松絞り、これは宮熱田神事、名古屋ですね。こういったものを作っております。

これは江戸菊なんかは世界的にもう、非常に貴重な品種でして形が変わっていきます。一度満開になって、それがまた変化してきて、そういった菊なんです。こういった遺伝子は世界中どこにもないです。北京で展示会なんかをすると、北京の全国から集まった菊の育種家、学者さんが非常に興味を持たれます。

こんないろんな菊があるわけですね。肥後菊なんかはこういったいろんな菊がありまして、こういったものも世界に通用します。嵯峨菊もそうですね。伊勢菊、こう垂れ下がる文化ですね。丁子菊、これは江戸時代にもう開発されていきました。非常に洋菊っぽい花なんですけ

ど、こんなようなものがあります。こんなふうに表示をしました。すぐにテレビ局も来てくれます。現場で育てなければいけないので、こんなふうに表示しております。ツバキなんかもその代表です。

名古屋といえば、愛知県といえばこの古典的な遺伝子、歴史を物語るものとしては名古屋アサガオというのがあります、非常に大きな花ですね。お抹茶に見立てた、お茶わんの中で栽培する非常に大きな花なんです。100年ほどの歴史がありますね。こういった花は。名城公園フラワープラザで展示会をやっておりますね。これは名古屋ツバキ、尾張ツバキといいますけれども、こんなようなものもごさいます。こういった歴史的なものを、ぜひとも皆さんに知っていただいて興味を持っていただいて、世界に通用するものだという事を知っていただきたいと思います。

ですが、結果的に我々がいつもやっている仕事の8割ぐらいはこれなんです。非常に市場の敷地内に豊かに雑草が繁茂しております、これを毎日のように取っております。非常に格好悪いんですけども、こういう仕事が8割、あと文化的な活動2割で何とか成り立っておるということでごさいます。これは雑草を駆除して、し終わるとこんなふうになります。おそらく私の持論では、雑草を取るだけで緑化は非常に進歩すると思います。新しく木を植えるという考え方よりも雑草取り、これだけで美化ができると思っております。

以上でごさいます。ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。すばらしい菊ですけども、あまり知られていませんわね。私も初めて見たようなことでごさいますけど。

ということでございまして、続きまして、それじゃ、中川さん、お願いいたします。

【中川】

プレック研究所の中川有里と申します。よろしくお願ひいたします。

私どもの会社では環境をキーワードに仕事をさせていただいておりますけれども、ここモリコロパークでは10年前、愛知万博の自然環境アセスメントですとか、こどものひろばの設計でお世話になりました。そして、今回10年目の記念にあいちフェアの基本計画の策定、そして、会場整備の設計施工段階からは愛知県造園業界の主要な幾つかの会社の方とJVを組む形で携わらせていただくことができまして、非常に感慨深いものを感じております。

緑のある豊かな暮らしを実現するためということで、まず都市緑化フェアのお話をさせていただきたいと思うんですが、それはなぜかといいますと、ここに統一テーマがありますけれども、文字どおり都市の中、また人の暮らしの中にどうやって緑と花を入れていこうかということが今回のあいちフェアのテーマであるからです。具体的には、愛知万博で学んだ

「自然の叡智」を継承する、緑はつなぎ手として、みんなで作り上げる、ものづくり県・愛知のすばらしさを発信するということを目指してやってきました。

これは愛知万博の際のバイオラングなんですけれども、愛知万博のときのシンボルですが、これが今どれぐらい発展しているかということを見せるということで、今回もいろんな企業さんが参加していただいて緑化壁を見ることができます。

あと、これは緑はつなぎ手ということで、鏡の中の花畑ですが、鏡の中の、ちょっと鏡がこちら辺にあるんですけれども、その手前の真ん中に皆さん立っていただくと花いっぱいの中で写真を撮ることができます。つまり愛知万博と同じように、皆さんの思い出の中に花と緑があるという、つなぐという点をアピールするような形で工夫をさせていただきました。

また、ちょっとここにはないんですけれども、あいちの庭ということで造園業者さんが家族をつなぐ、また、まちをつなぐというテーマでいろんな工夫と技術を提案させていただいておりますので、それを見ていただくだけでも非常に参考になるのかなと思っております。

あと、こちらはこいの池の近くなんですけど、花しずくということで愛知県内、また全国の自治体さんが地域の風景をこちらのほうで、花で作っていただくということをしていただいているので、これも非常に楽しんでいただけるのかなと思います。

あと、花棚田というところで、愛知県の棚田の風景を花で再現するというので、これも非常に種類と数、たくさんの花を花棚田として再現しております。今回花の生産高日本一が続いている愛知県で、これが50年以上続いている愛知県で開くということで、愛知の花を使うということを非常にこだわってあいちフェアを開催させていただいております。

この公園の中に非常に多様な花がある、美しい地域地域の花があるということにはすごく意味があると思っております、1つは公園が地域の産業と人々の生活を結ぶ場になるんじゃないかということ、あと2つ目は愛知らしさを広く発信できるということがあると思います。あいちフェアで非常に花と緑の美しい空間づくり、この意欲と感動、また、花き産業ですとか、造園業者さんとの連携、協力が得られましたので、これをぜひ愛知県の各所へ広がっていくことを期待したいと思っております。

これが花棚田の、ちょっと工事中の感じですが、いろいろな花が立っていますので、また楽しみにしてください。

最近グレーインフラからグリーンインフラへということが言われておりますけれども、特に例えばこういったよくある都市の話で、壁を作りましょう、地下に貯水槽を作りましょう、それで都市の問題を解決しましょう、というのがあるんですけれども、じゃ、これに緑地を作ってみましょうと。一つ一つの機能は壁や貯水槽に負けるかもしれませんが、大気汚染を防いで土に水を貯めてくれて、ついでに蒸発散でヒートアイランドを防止してくれて、

見て美しく心がほっとする。

また、この生け垣や花を育てることで、ご近所の方と会話が弾んだりすると、いざ災害が起こったときに助け合いがうまくいくというところまでつながっていくわけです。多機能を一举に賄えるのがグリーンインフラということで、これを増やしていくにはどうしたらいいかと。これは機能の話をとくさんした中であれなんですけれども、まずは美しいと緑、花であることが大事だと思います。それは非常に美しいということは緑が元気ということですので、機能を発揮するためにもそこが重要なことというふうに考えております。

そのこのういった美しい緑をつくるために重要な、どうしたらいいかということなんですけれども、見えないところ、つまり地面、根っこが生えるところと人の手がどれくらいかかっているかということが非常に大事かなと思っております。愛知県はもともと栄養の乏しい土地の多いところなんですけれども、都市という本来あまり緑や花の生育には適さないところに入れてあげているわけですので、より生育しやすい環境を作ってあげるのが大事なことかなと思いますし、そうした人の緑や花に対する気遣いですとか努力というものがあるところに美しい緑や花が生育するのではないかと考えています。

そういった気遣い、つまり花や緑を美しく咲かせるための基本的な知識を子供のときから培うということも大事なことなので、花や緑を育てる経験というのをより多く積むという点で教育等も非常に大事だなと考えております。

今日はそういった美しい花や緑を増やすということを実践されている方々が集まっていますので、私も勉強させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【大村知事】

どうもありがとうございました。

それでは、続きまして古木さん、お願いをいたします。同じくですか。

【古木】

中部電力新名古屋火力発電所の古木です。

緑化を推進する企業ということで今回出席させていただいております。ブルーボネットにつきましては、これは名古屋港にあるワイルドフラワーガーデンなんですけれども、実はこのブルーボネットにつきましては、火力発電所の敷地の中にございまして、厳密なことを言いますとこのブルーボネットの設備自身が火力発電所の設備となっております。従いまして、発電所の工場の緑化施設の一部を開放するという形でブルーボネットということで運営させていただいております。関係会社を含めまして中部電力グループとしてブルーボネットを運営し、またブルーボネット以外にも芝生広場だとか、そういった無料の施設についても開放しているというところでございます。

簡単にちょっと新名古屋火力発電所の説明をさせていただきたいと思います。画面にありますように、新名古屋火力につきましては名古屋市港区にございます。港区といいましても9号地といいまして、埋立地のところございます。アクセスにつきましては名港トリトンができましたので、これは潮見インターから行きますと車ですぐというような、立地条件も非常によくなったというところでございます。

これは火力発電所の航空写真なんですけれども、向かって左側、これが発電設備でございます。その右側になりますが、これはブルーボネットということでございまして、真ん中に公道を挟んでございますけれども、この発電所とブルーボネットにつきましては同じ敷地ということでございます。ただ、当然ではございますけれども、発電所とブルーボネットの間につきましては、これは境界線を作って敷地の管理ということはしてございます。

発電所の中の様子なんですけれども、発電所の中は至って普通の工場でございます。同じように発電機がずらざらと並んでいる、こういった建物の中だけを見ると普通の工場ということでございます。

これはワイルドフラワーガーデンの部分の拡大でございますけれども、これがブルーボネットの全体なんです、発電所では海水を使いますので、海水の温水の放水口がここにあるんですけれども、この温水を使った形でこの園内の暖房だとか、河川の温度上昇をしながら公園をつくるというような取組もしているということでございます。

続きまして、これはブルーボネットの園内の様子なんですけれども、これは実は発電所の煙突なんです。名古屋港に位置するというので我々は景観に非常に配慮した発電所をつくりまして、一見見ると建物のように見えるものですから、ポートビルの兄弟なのかというような質問だとか、あるいはこの上にエレベーターで乗れないのかというような話がよく見学者からあるんですけれども、これは上ることはできません。煙突ということでございます。したがって、ブルーボネットを含めまして発電所と景観をあわせた取組ということでさせていただきます。

これは園内の花の様子なんですけれども、これは春の様子でございます。なかなか花の命は短くてという言葉もありますように、年間を通して花がきれいに咲いている時期というのは非常に限られているところもございまして、5月と、それからちょうど今回のフェアの実施時期でございます9月の後半から10月というのが非常に花の咲くシーズンでございますので、ぜひご来園いただきたいなと思っております。

これは秋の企画なんですけれども、最近ハロウィンってどうも仮装しながらというのが全国的にも流行りつつある中で、我々もハロウィンというのは、これはもう数年前から取り組んでおるんですけれども、秋のときにはコスモスとか、そういったいろいろな花のガーデニ

ングとあわせてハロウィンの取組を行いながら集客をしているということでございます。

これは発電所の南側でございますけれども、芝生広場ということでこちらのほうは無料で開放しているということでございます。

これは園芸福祉活動ということで、地域の福祉施設の方をお招きいたしましてガーデニング、こういったことを通じまして緑との触れ合いを展開しているということでございます。

これは芋掘り体験ということで、南側のところに畑がございまして、こちらは地元の幼稚園のほうに貸し出しをいたしまして、これは収穫の様子なんですけれども、苗つけから水やり、1年を通した活動ということで取り組んでいただいております、こういった体験型のコミュニティーも備えつけたということでございます。

こういった取り組みを通しまして、緑と花に触れ合うということで、発電所の運営と並行しながら少なからずとも緑と花の地域への発展ということに貢献してまいりたいというふうに考えている次第でございます。

以上です。どうもありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。

それでは、最後に角和さん、よろしく願いいたします。角和さんも同じくですね。

【角和】

そうです。もう一度よろしく願いします。

どんぐりモンゴリの角和と申します。どんぐりモンゴリって変わった名前なんですけど、日本の水源地、日本の水源地は愛知県と岐阜県の水源地に子供たちが育てたドングリで植樹して、それでこれはモリコロパーク、COP10のときの事業、パートナーシップ事業のときに植えた木なんですけど、このときは3週間で2,000人の子供が参加して、自分たちが育てた苗木をたくさん持ってきて植えまして、右のほうの下が今現在の森です。約4メートルの大きさになっています。

これは北設楽郡の東栄町三輪の水源地なんですけど、水源地の森づくりをして生き物が集う森づくりとか、それから川から海へ生き物が育まれる水を流そうという予定で東栄町の山、うちの会員の山を使ったんですけど、実はこの東栄町の川は天竜川へ流れていまして、遠州灘のほうへ流れているということでちょっとがっかりしたんですけど、豊川のほうにも幾らか水を、豊川の20%ぐらいは東栄町から水をもらっているとか言っていましたけど、そんなことで植えています。ここは全部で7,000本、先ほどあいち森と緑の事業で何万本とおっしゃっていましたけど、うちはこれとモリコロパークで1万以上は行っています。毎年ドングリを植える人たちが1,000人育っていますので、まだまだこれから年間2,000本や3,000本植わ

っていくんじゃないかなと思います。

この写真は今から2年半前にガールスカウトの苗木作りのときに、知事がおみえになったものですから急遽参加していただいて、吉田長久手市長と、それから石井県議と苗木づくりを、牛乳パックの苗木を作ってもらって写真を撮ったんですけど、この苗木は去年の5月に宮城県岩沼市の千年希望の丘に植えまして、今この苗木も1メートルぐらいまで成長しています。

このようにどんぐりモンゴリでは買った苗は一切使いません。子供たちがつくった苗木を主体にして植えていくということで、うちはほかのNPOがいろんな植林をやっていますけど、全く逆の方向なんです。ほかは植樹祭のときに豚汁とおにぎりを渡して万歳とやりますけど、うちは全く違うんです。うちは苗木をつくった、苗木をというよりドングリのすばらしさ、自然環境とかそういう生態系を学んだ子供しか苗木づくりができないと。苗木をつくらないと植えさせないという強い信念のもとでやっていますので、これをやって約10年たちますけど、毎年3つの約束を守るどんぐりウォーカーが1,000人以上誕生しているというやつですね。この子供たちが中心でモリコロパークでも植林をしています。

今はモンゴルのほうの砂漠植林をちょっと中断しておりますので、ドングリは水源地なんですけど、モンゴリというのは蒙古樫と書いて、モンゴルの砂漠にたくさんある木なんですけど、そこで現地の子供たちと苗木を作っていますけど、それを一旦、一時停止して東北支援の苗木づくりをやっています。

東北支援の復興、森の防潮堤づくりに子供たちがつくった苗木づくりをモリコロパークの育苗場でやっています、この事業は愛知県の建設部との協働事業ということで、モリコロパークでも一番いい場所を借りて、日当たりのいい北風のなかなか当たらないいい場所があって、そこで現在も8,000本ぐらい作って、毎年育苗場から東北の被災地への苗木、それからモリコロパークの中で植える苗木、それから水源地へ植える苗木も作っております、今このほかに苗木として、これは岩沼へ出荷したときの写真で、長久手の吉田市長も駆けつけてくれて出荷したんですけど、下の真ん中辺の写真が岩沼市の市長ですね。お渡しして一緒に植えた木なんですけど。

この育苗場で8,000本作っていますけど、ガールスカウト、それから最近は左下、横浜ゴムの障害を持つ子供たちにも作ってもらっていますし、それから真ん中の写真は岐阜県の下呂の85歳の中島幸さんと五郎さん夫婦が作ってくれています。右下が浜松の育苗場ですね。このようにそれぞれ分散化しています。分散化をなぜするかというと、苗木に害虫だとか気候変動で一遍にやられる場合があるんですね。この怖さがありますので、浜松は潮風に強い苗木、それから下呂では寒さに強い苗木というように分散育苗して、これを一旦モリコロパー

クへ集合させて、それから東北のほうに持っていっているということでございます。

東北へ持っていった苗木は特殊な植え方をしています、我々は先ほど知事さんと記念写真を撮ったときに牛乳パックの苗木をお見せしましたが、牛乳パックで植えることで直根を早く下に行かせてそれで成長を早めるというわざを持っていますので、これを使って、子供たちもまた最近庭のないマンションだとかアパートで暮らしている人が多いものですから、ベランダで育てられる牛乳パックを主体としてやっています。

最後に緑化フェアのときに約4,000本のポット苗でボックスの中に入れて箱盛りを作って、その苗木の半分近くを浜口さんのところに協力してもらって里親をつくります。それで、それぞれ皆さんおうちへ持って行っていただきたい。来年の春祭り、モリコロパークの春祭りのときに持ってきてもらって、それを東北のほうへ植えに行くということを考えていますので、ぜひ皆さんもご参加ください。どうもありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。

それでは、一巡いたしました、角和さん、どんぐりモンゴリというのは、モンゴリというのはモンゴルという意味ですか。

【角和】

モンゴリというのは中国とかモンゴルにある蒙古櫟と書いて発音がモンゴリというんです。

【大村知事】

蒙古櫟。

【角和】

蒙古櫟です。このモリコロにもあったんですけど、モンゴリナラというのが。実際我々がこれは絶対違うと。葉っぱもあれも我々が砂漠でやっているやつがモンゴリナラでモリコロは違います、ということでやっとな名前が変わって、今この木はフモトミズナラという名前に。麓になるミズナラ、大体ミズナラというのは海拔600メートル以上から増えてくる木なんですね。それがこういう海拔80メートルぐらいで生えておるものですから、麓のミズナラというんです。

【大村知事】

そうか。木の名前だったんですね。モンゴリというのは。

【角和】

そうです。ですから、日本と内モンゴルの砂漠緑化をやっていますので、どんぐりモンゴリという名前ですね。

【大村知事】

なるほど。という名前。拠点はどちらでやっておられるんですか。

【角和】

拠点は長久手です。

【大村知事】

長久手のここを拠点にして会員さんも皆さんも、角和さんもこの長久手。

【角和】

私は名古屋の名東区です。

【大村知事】

このかいわいの方が多いということですね。

ありがとうございます。今一当たりご意見をいただきました。それでは、またフリートーキングということでございますが、ぐるぐると順番に一回りしましたので、また浜口さんのほうから補足で一言ずつ言っていただければな、というふうに思います。もう大分ずっと皆さんのお話を聞いてばっかりなので、また多分何か言いたいと思いますけど。

浜口さんのところはこのもりの学舎自然学校では、ここのモリコロパークを拠点にということですね。じゃ、会員さんは名古屋の方が多いのかな。

【浜口】

そうですね。愛知県内いろいろですけどね。

【大村知事】

全域。浜口さんはどちらですか。

【浜口】

私は今岡崎にいます。

【大村知事】

じゃ、先ほどのご意見にまた補足があれば、それも含めて皆さんの意見に対していろいろご意見、ご質問があればよろしくお願ひいたします。

【浜口】

さっき私ずっと皆さんのお話を伺いながらちょっと気になっていたことがあって、ここで質問とかしちやっても大丈夫ですか。永田さんにぜひお聞きしたいんですけども、最後に雑草取りがすごく大事だというお話をされていたんですけども、そのところをもうちょっと詳しくお聞きしたくて、雑草を取るということが緑を守るとか、どのように大事なのかというか、雑草があると何で困るのかみたいところを教えてもらえますか。

【永田】

それは自然環境の中でまさに野生の雑草、自然が保たれた状況の雑草という意味ではなく

て、人間が一回環境を破壊したとこでできる雑草、という定義で聞いていただきたいんですよ。

大抵こういった緑化の話、行政なり、民間の全てのところで大体花とか木を植えるという会があると雑草の話は後回しになるんですよ。でも、実際に単に花をぱっと植えるだけでもですが、まずは雑草の中でどう花を生かすかという、根底、頭の中にその基本がないと花は大抵育ちませんね。皆さん経験があると思うんですよ。ここにみえる方は。

だから、まずは雑草をどうするか。どう戦うか。それで、戦うレベルも、ウエートも80%ぐらい雑草と戦うんだと。その気構えがあつて初めて植物をいじれるんだと、そういったこれまでの経験的な感覚ですね。それを申したわけなんです。

【浜口】

なるほど。なので、持ち込んだものというか、要はお花を植えるときにも当然その場所にあつたお花じゃなくて、例えば菊とかそういうものを持ってくるけれども、菊だけじゃなくてそれと一緒に雑草たちも植えることになるというか、出てくるわけですね。

【永田】

そうですね。

【浜口】

なので、それとどう戦うかみたいな、なるほど。わかりました。ありがとうございます。

私自身はこのモリコロパークを活動拠点にしているんですけども、モリコロパークの中ってほんとうに自然のままの森のところと、それからいわゆる公園というか、整備されている部分とあつて、私のいる森の学舎というのはちょうどその境目というか、どちらもあつた場所なんですよ。そうすると、もちろん森の中というのは当然雑草も生えています。雑草といつてもそれぞれ自然に生えてくる草がいろいろあるわけなんですけれども、例えば建物の前の広場だと皆さんがなるべく入りやすいようにとか、近づきやすいようにやっぱりきれいにしていないと、なかなか雑草があると近づきにくいというか、そういう問題が公園としてはある。

でも、一方で、自然に親しんでほしいという立場からいくと、雑草があることでそこに来る生き物たちがたくさんいるわけですね。例えばそこへバッタがすごくたくさん増えてみんなでバッタとりをして楽しむとか、そういった草があるかないかでそれぞれの立場で草は必要だという人と、草は抜かなきゃということがあるので、何かそういったことを常に意見交換しながら、緑というものを考えていけるといいなというのをすごく今日は永田さんのお話を聞きながら感じました。

以上です。

【大村知事】

ありがとうございます。それでは、また続いて近藤さん、先ほどは中部国際空港での緑化についてのお話もお伺いしましたが、それに限らずいろいろ皆さんのご意見を聞いて何かご発言があればお願いします。

【近藤】

そうですね。私は中川さんのお話の中でバイオラング、私も万博へ行ったときに拝見したんですけれども、結構生育環境とかも限られていると思うんですけれども、長期間栽培というか、生育させるための工夫、今回また進化したというのをお聞きしたんですけれども、私も空港では小さなプランターで、実はグリーンカーテンを3月に定植して、この夏にはガラス面を覆うんですけれども、11月まで長期にやっているとどうしても葉っぱの艶だとかがなくなってくるんですけど、そういった限られたところでどういう工夫をされているのかなというのがちょっと気になったので、質問したいと思いますが。

【中川】

私は緑化壁というか、そちらの緑化壁の専門ではないんですけれども、やはりいかに緑を長く美しく保つかということで、それぞれの企業さんがすごく工夫をされているんですね。

やっぱりグリーンカーテンの場合は少し小さいというか、植物体に比べてみると小さいプランターになりますけれども、緑化壁の場合はもう植物体のすぐ裏にそれを支える基盤ががちりついているみたいな形のものが多いので、やはりそのバランスというか、そこら辺を考えて、各社さんの技術をそこに投入して技術を高めながらやっているというところになるかと思います。

ですから、そのバランスですね。基盤と植物体の大きさのバランスみたいなところを考えられてやっているのかなというふうには思いますけれども、済みません。ちょっと専門じゃないんですけど、そんな感じかなと思っております。

【近藤】

ありがとうございます。

【大村知事】

ありがとうございました。

それでは、続きまして、また天野さん、先ほどずっとガーデニングというか、そういった話につきましてお話をお伺いしましたが、主に豊田市内というか、周辺も含めてですか。活動というかお仕事は。

【天野】

そうですね。主にはお客様としては市内の方や、あとは市外の方もみえるんですが、普段

やはりお庭を持っている方のお手入れとなると定期的にお伺いしてということになるので、行ける中という形にはなるんですけども、あとはそれ以外でも講座ですとか、ちょっとこういったイベントのときに教室を用いてどういった花を身近に楽しむかというプランだとか、花選びとか合わせ方についてを教室としてやらせていただくことが多いんですが、先ほど中川さんの話の中でグリーンインフラという言葉で、街並みの整備で機能的な面以外でもやはり美しさということで緑を使った街の整備という話があったんですけども、緑で整備するということでもやはり美しさということで美観的なもの、何をもって美しいと感じるかとか、そういった感性も含まれると思うんですが、そういったものというのはやはり子供のころから親しんだりとか、そういったことがあってやはり大切さであったりとか、そういったものが欲しいと思うということも育む面かと思うので、先ほどの角和さんの子供が苗木をつくらないと参加できないということもあったんですけども、やはりそういうようにまずはやってみて、その大切さとか難しさというのがわかってやるということで、そういった経験がどれだけできるかという機会も、環境の中も少ないということも多いので、いかにこういったイベントであったりとか、住宅が難しければこういった公園の中での活動という場がいかに持てるかというのが大事ななと感じました。ありがとうございます。

【大村知事】

ありがとうございます。ガーデニングでやっぱりその時々ではやりすたりってありますよね。今はどういう感じですか。好まれているのは。

【天野】

そうですね。いろいろ基盤となる人気の花とかもあるんですけども、あとはやはり全般的に好まれる花とか、例えばバラでしたら誰もが好きでやってみたいと思うものもありますし、ただやはり年代にもよって好む色とか、好みもどんどん変わっていくので、言ったらそういった主観的なものというのはかなり大きいので、そういった好みにいかにこちらが提案として近づいたものが作れるかとか、提案できるかというのが大事ななというのは感じます。

【大村知事】

ちょっと前でしたかね。何かイングリッシュガーデンみたいなのがはやったというか、好まれた。今もですか。

【天野】

そうですね。やはりあのときはみんなそういった世界を知らないこともあって、それがやってみたいということで一時期そういった流れがあって、そのままのものを日本で行おうということだったんですが、やはり気候の違いですとか、夏の高温多湿という面で、このままにはいけないということで、やってみたけれどもうまくないということで、やっぱり初めて

の方は初めてやってみたことってなかなかうまくいかないことが多いので、そういった中でそこで向いていないと思ってしまうのか、何がいけなかったのかということでそこをいかにフォローするというか、それをバックアップできるこういった民間の企業であったり、公園のような施設という存在がすごく大事かなと思います。

【大村知事】

愛知で好まれているという特徴は何かありますか。特に。全国的に大体似たようなものですか。

【天野】

ただ、愛知県はほんとうに花の産地も盛んですし、あとは寄せ植えだとかハンギングバスケット、花飾りをすごく地域の方も盛んにされる地域なので、興味を持つ方はすごく多いと思います。

【大村知事】

なるほどね。関心を持っている人は多いかもしれませんね。ありがとうございます。

それでは、永田さん、皆様のご意見をお聞きした上でまた何かご発言があればお願いします。

【永田】

先ほど雑草に質問をいただいて非常にありがたかったですけれども、日本の国土はもともと火山でできたような国ですよ、世界的に見ると。地球規模で見ると日本自体が火山なんですけれども、日本の土は火山性のものでして弱酸性なんですね。おそらく全国どこの地面、大抵の地面を掘っても非常に植物が育ちやすい土が出てくるんです。こんな国は世界中に見て珍しい。園芸界の方はご存じだと思うんですけど、世界で非常にうらやましがられる土地なんです。

ですから、何でも育つし、何でも育つということは雑草も育つんですね。外来性種も育つ。ですから、日本ほど何でも育てやすく雑草に苦勞する国もないわけなんです。ですから、それこそ雑草と戦う気力というのが非常に大事ですね。

それと、あと今も話に出ましたけれども、イングリッシュガーデンが流行りましたましたが、日本の太平洋モンスーン気候というのは夏に高温多湿で、北海道を除くと、北海道だけが西岸海洋性気候ですかね。ヨーロッパのあれに近いところがありますけれども、本州のほとんどはもう夏はイングリッシュガーデンに向いていないですね。そういった中で全てがだめじゃなくて、ほんとうに天野さんが苦勞されているように、いろんな品種を組み合わせることによってそういったものもつくり上げることはできるんですけども、もう少し日本に根づいた植物を見直すことも必要かなと思います。

その文化を日本は持っていないかという、もう過去に十分堆積したものがあって、それを時代の流れの中で失っているというか、忘れていただけなんです。どこかしこを探していくと、その遺伝子がどこかに、日本の気候に耐えられて日本の環境美化に、あるいは人の心に訴えるほどの美しさを持った花、木、そういったものは幾らでも埋もれているんです。

ただし、商業ベースには乗りづらい。増やしづらいとか、なかなか商売としてはしづらいたくさんだけれども、そういった遺伝子を絶やすことは非常にもったいなくて、一度それを手にされた方はずっと一生物として育てていけるだとか、そういったものをもっともって掘り下げて、私の仕事としてはそういったものを掘り下げていきたいですし、そういったものを皆さんに紹介していきたいと思いますし、原点はもしかしたら角和さんと同じようなところに向いているのかもしれませんが。分野は違うんですけどね。ですから、そういった部分をできるだけこれからも紹介していきたいなと思っております。

以上でございます。

【大村知事】

確かにそうですね。日本の気候だと雑草があれするということで、前に国会議員のときによくいろいろ説明したときもありましたけど、日本は農業をやるのに農薬を使うんですよね。何でこんなにたくさん使うんだみたいなキャンペーンか何かをマスコミに張られたときもあったと思うんですけども、適度に使わないととても農業できないですよ。雑草だらけで。

だから、いろんなご意見はあると思いますけど、そこら辺のところのお話を今聞いていて、そういうこともあったなと思いながら今思い出しましたが、確かに何でも育ちやすいというか、ほっておけばすぐ、ジャングルとまでは言いませんけど、ほんとうにあれですよ。

【永田】

そうですね。雑草の温床というか。

【大村知事】

もうぐちゃぐちゃになりますもんね。だから、そういう意味ではいろんなものを育てていくのは大変なところではあるし、逆に言うと何でも育つというのはおっしゃるとおりかなと思うので、そこら辺も含めて緑化といいますか、森づくり、緑づくり、可能性もあるし、いろいろ苦勞もあるということですね。ありがとうございました。

それでは、中川さん、また皆さんのお話を聞いた上でどうでしょうか。

【中川】

そういう植物をつくるベースみたいなものがすごく大事かなと。でも、その大事さってどれぐらい広く知られているのかなというのがありまして、私もちょっと自由意見の中であれさせていただきたいんですけども、基盤の大事さとか、それを子供のころから身につけて

いくということがすごく大事なかなと思うんですけど、やはり1つの種を育てるためという目的もありますし、じゃ、そこでやっぱり永田さんがおっしゃったように、雑草ということでその周りの種との関連性みたいな話に広げて、どれぐらい今子供たちは学んでいけているのかなというのが1つありまして、近藤さんや角和さんが子供たちと接する中で、そういったことを子供たちは身につけていっているのか、ということちょっとまたお話ししていただけると大変助かるかなというふうには思います。

【大村知事】

じゃ、どなたか。じゃ、古木さんからいけますか。角和さん。じゃ、角和さん。

【角和】

もう直接関係ないですけど、先ほどの永田さんのお話で、日本の国土が弱酸性ということで、私は砂漠で植林をやっています、黄砂というのはどっちかというとアルカリ性なんです。だから、昔から黄砂が大陸から西の風で飛んできているから日本の土壌はよくなっているというところがあると思うんですね。

それからもう一つは、黄砂が飛ぶことによって地球の温暖化を防いでいるんですね。太陽熱、光を遮っていますから、そういういい面もあるんですけど、最近の黄砂というのは向こうの石炭だとか自動車の排気ガス、NO_x系のものが付着してくるから問題だという。山でもナラ枯れだとか、それから松枯れですね。これも黄砂の影響が大きいと思うんですね。大体黄砂で枯れる順番というのは日本列島の中で山口県とか鳥取県から来るんですね。これはやっぱり一番黄砂が飛んでくる場所なんですね。

そんなことと雑草というんですけど、砂漠でよく植林をやっています、昔草原だったところが砂漠化したところ、ここには雑草が生えないと植林できないですよ。なぜかというやっぱり砂が動きますからね。風で。草が生えて根が下まで行ったときを目がけて植林していくと活着がいいみたいなね。

ですから、子供たちにそういうような直接雑草が邪魔だとか悪いという話より、そんな話からして植物に興味を持ってもらうようなことはしていますけど、このモリコロパークでも雑草の種類がすごく増えていますね。今までモリコロパークになかったような雑草が飛んできていると。これはやっぱり風の関係でしょうね。

あとは高山植物なんかを見ても、結構モンゴルの草原から飛んできたような種類の木が多いですもんね。この辺でもネジバナなんていうのが増えていますけど、これは完全にモンゴルの草原の花ですね。

【大村知事】

黄砂は日本の季節の風物詩だったけど、最近はPM2.5がついてきているからはっきり言っ

て迷惑この上ないという感じですけど。

【角和】

肺の中に入ると30年後ぐらいに必ず出てきますよね。顕微鏡で見ると金平糖みたいにとげがありますからね。肺の中に刺さって残っていますから危ないですね。

【大村知事】

中川さん、日本は先ほどのお話で北から南まで非常に日本列島は長いし、いろいろ気候風土も多様なので、植生が違うじゃないですか。ずっと北から南まで。そういうものに合わせたような、例えば先ほど言われたバイオラングもそうだし、緑化もそうだし、それぞれの土地とか地域に合わせた植生を考えながらやられているということですよ。

【中川】

それはありますね。やはり生育する環境を整えて、都市緑化の場合は特にという話で環境を整えてあげるということはあると思いますけど、それはもちろん気候も考えて温度も湿度も生えやすいものとか、在来種というんですかね。日本本来の植生なり植物というのは非常にやりやすいし、そういう緑化なりに使っていくという流れになっていくと、非常にそれはそれで生物多様性にもいいのかなというふうには思っています。

【大村知事】

在来種はその地域に合ったのが大事ですよ。今は外来生物が動物も植物もいっぱいあれですけど、外来種はできるだけ、我々もちろん行政は駆除していくとか、あれしていく方向ですけど、それはやっぱりそこはそういうことでやっていかないかんとということですよ。

【中川】

はい。そう思います。

【古木】

自然のほうも結構再生力があるようで、我々木曾川の水を引いて工業用水を使っているんですけども、ブルーボネットに小川を流しているんですが、メダカだとかギンヤンマが戻ってくるようなことになってきていますので。

【大村知事】

それでは、また改めて古木さん、ご発言をどうぞ。

【古木】

先ほどはいろいろ皆さん園芸の関係だとかガーデニングをやられているというふうに関心しましたけれども、ブルーボネットでも花の展示以外に、そういったガーデニング教室だとか、そういうこともやっておるんですけども、コンテストをやったんですね。そうしたらそれ

に応募する人がいて、それで賞品を、例えば優秀賞とかそういうのをとるとものすごく喜ばれて、また家庭に戻られて裾野が広がるというようなことがございました。

先ほどのギンヤンマの話じゃないんですが、最近カメラを片手にすごく花とか生物を接写する方も非常に多くて、写真をせっかく撮られているんだったら写真展も開こうかということでブルーボネット写真展を開きました。そうしたらそれにもいろんな応募をしてくれる人がおったものですから、やっぱり撮るだけではなくて、ある意味発表の場を提供するというのが非常にいいことなのかなというふうに思っていて、それまで講座とかそういうことばかりに取り組んでおったんですけども、最近はそういう例えば写真展だとか、あるいは園芸バスケットコンクールとか、そういった催しもするような形で広告をしています。

例えばこれは私が今ちょっと思いついてあれなんですが、企業もいろいろ進んで緑化はやるんですが、やっぱりインセンティブというか、動機づけするのにそういう企業の緑化コンクール、普通に緑化の表彰とかというのはあるんですけども、写真展みたいなものがあつたりすると意外と、ものづくりの県でございますので、応募する企業が意外と多いのかなと思いますので、そういうのがあつたりすると非常にいいのかなとちょっと思いました。

【大村知事】

ありがとうございます。今、発電所のところは大体緑化とか、そういった形で地域開放といたしますか、そういうものをつくられていますよね。私の家というか、実家に近い碧南の火力発電所もあります、あそこも大分石炭の灰捨て場の跡だけがだんだん広がっているので、そこを森にさせていただいてやっていただいているのは大変喜ばれていますけどね。

【古木】

先ほど雑草の話がありましたけれども、なかなか根づくのが非常に苦労するところがございますので、そこは我々はちょっと素人なところがあつたので、いろんなご指導をいただきながらということでございます。

【大村知事】

まだまだよろしく願いいたします。

それでは、最後に角和さん、皆様のお話をお聞きした上でまた何かご発言があればお願いいたします。

【角和】

1つ知事にお願いしたいんですけど、あいち森と緑の事業というので7年間いただいて、水源地の森づくりと、それからモリコロパークのナラ枯れ地の緑化再生、こんなことを子供たちと苗木を作って楽しんでいるんですけど、大体が決まってスタートできるのが5月なんですよね。

生き物ですから、一番大事な苗木というのはやっぱりもう我々植林地の準備から種まきから、苗木を育てるのも秋から始まって遅くとも2月の末までに終わっていないともう植えることができないですね。だから、その辺をちょっとお考えいただいて、報告書を出すのは1月でも構わないんですけど、活動としては5月以降の活動しか認めないというものでは困ると思うんですね。この辺をちょっと直していただけるともっともっと幅が広がると思います。

それから、もう一つは、うちは子供たちが苗木を作って持っていきますので、これが一番たくさん集まるのは夏休みなんですよ。そのために牛乳パックのポット苗なんかを植えていますけど、いまだに大学の先生とか、それから営林局の人は夏の植林をやるばかりがいるみたいな表現を平気でしていますけど、何で悪いんだと言いたいんですね。モリコロパークでも夏の植林をやったってちゃんと育てているんですよ。

どこがおかしいのかなと思ったら、営林局あたりは材木をつくるための植林なんですね。畑の苗木を。それと子供たちとつくるドングリだとかなんかの花の咲く木とか、実のなる木のあれは全然時期が違うと思うんですね。いつでもいいと思うんですよ。ですから、その辺も含めてちょっとあいち森と緑の事業ももう少し幅を広げてもらいたいなと思いますね。

【大村知事】

営林局とか営林署は杉、ヒノキですもんね。それは違いますわね、確かに物はね。ですから、そこはあれでしょうけど、わかりました。今言われたのは全くそのとおりなので、5月からスタートというのは行政の予算というか、会計年度が4月からだからという、そういう話でしょう。

【角和】

お金の問題だけじゃないんですよ。領収証がどうのこうのじゃなくて、子供たちと一生懸命やっているところの活動が報告できないという話なんですね。

【大村知事】

わかりました。全くそのとおりなので、そういう役所の都合で期間が決まるというのはけしからん話なので、また意味のない話なので、それは早速変えますから、今日テイクノートしていますので、早速もっと秋から2月とか、年度をまたいでの事業とか、フレキシブルにやるようにいたしますので。

【角和】

よろしくをお願いします。

【大村知事】

またそういったご意見をしっかりいただければというふうに思っています。

ありがとうございます。ずっと一渡りいただきましたが、またさらに、まだ時間がありますので、ご発言があれば、今度はどなたからでも結構ですが、いかがでしょうか。

【角和】

ちょっと皆さんにお聞きしたいんですけど、外来種と言われてますよね。ちょっと私はそれがいまだにわからないんですけど、外来種って西の風で飛んでくるのを何で外来種と言わないんですかね。それから、西の大陸から朝鮮半島を伝わってきたドングリの落葉樹の木なんかはみんなそういうルートで来ていますね。それから、常緑樹でも中国の南のほうから照葉樹林から来ているものがあるんですけど、そういうのは外来種と言わずに、草木でも花でも。何か太平洋を渡ってくるとみんな外来種とか、東南アジアから船の南京袋についていたから外来種とか、どう違うんですかね。外来種という意味が。

【古木】

人為的な手段で入ってきちゃったやつを何となく外来種って言って。

【大村知事】

外来種もいわゆる国のほうで特定して指定して、いわゆる繁殖量が強くてどんどん既存のところを、普通の森を侵食したりとか、干潟をどんどん壊しちゃったりとか、生態系を壊すやつを指定して駆除していると、こういうことだと思いますがね、そのところは。

ですから、ついこの間も植物だと去年ですかね。豊川というか、豊橋か田原かあっちのほうでイネ科のあれがむちゃくちゃはびこって、干潟がなくなっちゃうというので、それは人海戦術で地元の中学生かな。皆さんで、地域の人で一斉に人海戦術で全部引っこ抜いてやったというのもありましたけど、そういうことかなと思いますし、最近では竹ですよ、竹。最近もちょっと目につくんだけど、もう知多半島なんかへ行くと森がどんどん竹に侵食されて、竹はなかなか切るのが堅いものですからこれは容易でないなというふうに思いますけど、あんなもの典型的なあれで、モウソウですもんね、あれ。典型的なあれですよ。これは駆除せないかんなど。

だから、竹もあれも森と緑づくり事業の対象にして、里山の竹ぐらい切ってあれするやつをささやかながら始めましたけど、あれもほっとけばほんとうに見る見る、この間に常用樹林はみんなやられちゃいますもんね。だから、そういうことかなと思いますけどね。

【中川】

外来種ということだとすると、越境してきたりするときも遺伝子の場合には外来的な扱いを受けたりするんですけど、それ種だとあまり区別ができないということと、あと古くから日本に入っているものはもう日本に根づいているので、それほど今後も悪さをしないというか、日本の植物と折り合っている部分があるので、そこをいろいろ突き詰めていっちゃうとなか

なか大変なことになるというのも1つあるのかなど。ですので、すごく新しく入ってきたもので爆発的に広げていきそうなものを今問題にしているのかなというふうには思いますが。

【永田】

結局悪いやつが外来種というふうに呼んでいて、日本の太平洋モンスーン気候でさらに日本の植物を駆逐するもので、ほかの日本の生態系を崩すものを外来性雑草で特に目をつけて何とか種とかつけていますけど、先ほど言われたように、私は木に詳しくないんですけど、でも梅なんかは中国から渡っていますし、日本の皇室の紋章になっている菊だって8世紀に『懐風藻』という本を見ると初めて登場するので、渡ってきていますよね、中国から。日本にも原種はあるんですけど、今大きい菊なんかは、見た菊というのは中国から渡っているんですね。

ですから、外来種と言ったらほんとうにそのくくりも入っちゃうんですけど、外来性雑草として、欲しくはないけど、日本人としては要らないけれども、勝手に増えていって、日本の必要な植物を枯らしてしまうというので一般的に私は使っちゃうんですけど、困ったのはきれいなやつですよ。アヤメ科のキハナショウブというのが、ご存じですよ。非常に問題になっているんですけど、真っ黄っ黄の、黄色の遺伝子を持っているのはそれぐらいしかないんで、それを育種の親に使って問題ない種をつくったりもするんですけど、キハナショウブそのものはその辺にぽんと植えると、例えばショウブという名前がついちゃっているんで、ハナショウブと一緒に植えるとハナショウブは全部枯れちゃいます。カキツバタもだめになっちゃいますね。それぐらい悪いやつなので。

【大村知事】

繁殖するんですか。

【永田】

繁殖しちゃうんです。その繁殖力が異常なんですね。それできれいなんですよ。きれいでハナショウブはピンクばかりなので、黄色を入れたいと思ってそれを植えたが途端、もうだんだん減って行ってしまってだめになってしまいます。

【大村知事】

それって今愛知県のいろいろな池でもありますか。

【永田】

あります。見かけます。最近ちょっと育ちが悪くなったんだけど、水面が高いんですかねとか何か言われるんですけど、見たらキハナショウブが植わっていることが多いです。

【大村知事】

それがどんどん繁殖してほかのやつを全部駆逐しちゃうんですか。

【永田】

そうなんです。そういうのが困ったものでして、おそらく行政の方でも、例えばある町の緑化担当の行政の方が相談されたんですけど、ご存じない場合が多いので、そういった知識が必要ですよ。

【近藤】

愛知県の県木はハナノキなんですけど、なかなかハナノキを見ることがなくて、調べると東三河の奥のほうに天然記念物としてニホンハナノキがあるんですけど、今ほとんどアメリカハナノキになってしまっていて、学校のほうでも東三河のほうから接ぎ木で何とか、天然記念物なので、宮内庁から許可を得て接ぎ木で増やしているんですけど、なかなか知らないところで広がっているところがあります。

竹のことでは知多半島で、半田農業も知多半島にあるんですけど、知多半島でもモウソウチクを皆伐して炭焼きにしたりだとか、結構炭窯をやっている方もいらっちゃって、グリーンカーテンで使っている土の中にも美浜町の荒廃竹林の竹炭を一部使ったりだとか、いろいろな用途で広がりを見せて、そういったモウソウチクなんかでも何とか少なくしていきたいなというのは思っていますね。

【大村知事】

ほんとうですね。何かもうイタチごっこみたいな感じであれですよ。繁殖力がすごいでしょ。そうですか。確かにハナノキは愛知県の木ですけど、なかなか正直言って私もあまり見る機会がなくて、確かにこれはもうちょっと何とかせないかなというふうに思いますけど、それも含めてさっき言われた外来種、キハナショウブですか。そういったものもあれですけど、やっぱり外来種のあれもちろんあれですけど、そういうショウブとかカキツバタというとなん年か前に僕は地元だったんですけど、国会議員のときですけど、知立のカキツバタの有名なところがみんな根腐れ病で枯れちゃって一生懸命今再生していてもまだなかなか追いつかないので、ああいう名所からカキツバタがなくなっちゃうとちょっと残念ですよ。

【永田】

そうですね。その辺の問題も時々お聞きしまして、知立のカキツバタも私は直接タッチしていないんですけど、その話も聞きましたし、やっぱり見ると一度だめになってしまったその原因はわからないんですけど、今度は新しくまた再生させようとして、ほかから品種を持ってきちゃってまた植えようとするんですけど、適合しなかったり、あるいはその植物自体が本来のカキツバタをさらにちょっといじめるような立場の強いカキツバタだったりとか、刈谷の小堤西池というカキツバタの原生地もあるんですけど、そちらでもその辺の問題が起

きていますね。

豊明市では、カキツバタではないんですけど、何ていう名前だったかな。やっぱり原生種がありまして、それを絶やさないように今度はメリクローンってクローン技術で植物を増やす技術があるんですけど、それで増やしたものを定植して絶やさないようにしたんですけども、結局それがメリクローン変異をしていて、本来5弁の花が6弁に咲いてしまったと。今はどうされているかという、これは愛知教育大学の中川先生からお聞きした話なんですけど、担当されているので、今は一度増やしたものを今度は一生懸命抜いているというんですね。またせっかく増やしたものを抜いて元のものを増やそうと。そんなようなこともおきていますね。

【大村知事】

なるほどね。いろいろ皆さんご苦勞していただいていることはよくわかりますけど、大分時間がやってまいりました。よろしいですか。一渡りといいますか、大分お話をお伺いしました。

今日はありがとうございました。それでは、そろそろ締めさせていただきたいと思いますが、今日は皆さんから活発なご意見をいただきまして、ほんとうにありがとうございました。それぞれの分野、ジャンルで愛知の緑づくり、そして潤いのある街づくり、そうしたものに尽力いただいているということでもありますけれども、よくよくお話をいただきましてほんとうにありがとうございました。

皆様からいただきましたご意見、ご提言をまたしっかり受けとめさせていただいて、いろいろ今日いただいたご意見をまた整理させていただいて、また皆さんにそういった意味ではご意見、ご要望をいただいたものはフィードバックさせていきたいと思っておりますし、今後の私どもの県政に反映をさせていただきたいというふうに思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

何はともあれ来月から、9月12日からここで万博10周年の全国都市緑化あいちフェアを行います。ちょうどあちらがポスターでございまして、花と緑の夢あいちというものとあわせてスタジオジブリの、愛知万博のモリコロパークで今でも一番人気はサツキとメイの家でございまして、それも含めてジブリのこれまでのあれをまとめたようなそういった展覧会もあわせてやりますので、またできるだけ多くの皆さんにこの2か月来ていただいて、10年前を振り返りながら大いにまたこれから盛り上げていきたいというふうに思っておりますので、また何とぞよろしく願いを申し上げます。

今日は貴重なお時間をいただきましてありがとうございました。また今後ともよろしく願い申し上げます。ほんとうにどうもありがとうございました。

— 了 —